

「足栗毛」における広重「狂歌入東海道」等の転用

新堀 道生

はじめに

当館所蔵「足栗毛」は、羽州街道の沿道風景を描き、狂歌・漢詩などを添えた作品である。成立は嘉永七年（安政元年、一八五四）、筆者は「ある主人」と序文にあるのみで不明である。本誌第三一号に石井志徳氏が全場面の画文を紹介している。

刈和野（現大仙市）から寺内（現秋田市）までの沿道風景を描くという内容から、作者は秋田の人物と推測される。したがって、絵も実見にもとづくものと漠然と考えてきたが、場面によって構図の巧拙が大きく異なるなど、種本の影響が疑われる部分もあった。このたび歌川広重の風景版画等と比較したところ、「足栗毛」はそれらから多くの画像と文章を転用していることが分かった。

「狂歌入東海道」は、広重の「東海道五十三次」のうち各図に狂歌を添えた形式のもので、天保年間の初版である。以下、「足」は「足栗毛」、「東」は「狂歌入東海道」の略号として用いる。

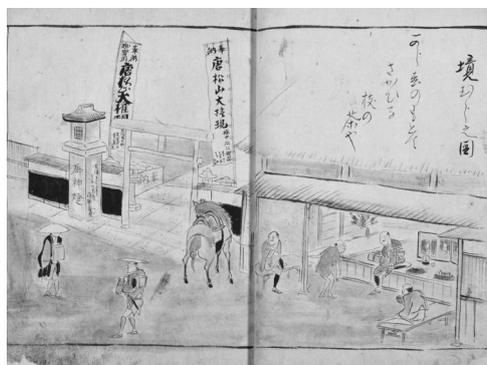
一 各図の分析

①「足」刈和野京屋はたこや之図は、「東」石部図の転用である。京屋は実在した旅籠である。場面の題も実景たることを示すかのようだが、そうではない。上部に添えた狂歌は全く異なっている。

②戸島駅場役処の図も、全面的に「東」石薬師図を転用している。ただし右上に小屋を描き、狂歌を載せない点が異なる。

③境村図は、「東」鞠子図と人馬や店舗が同じである。ただし画面左に鳥居を描いた唐松神社は実在する。部分拡大図のごとく、「東」を下敷きにはしているが、人物の表情や服の模様は異なっている。

④矢橋（現在は八橋と表記）図は草津図をまねている。店員に声を



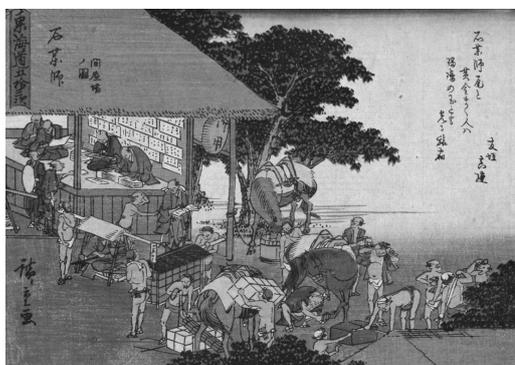
③「足」境村



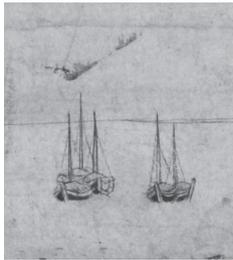
②「足栗毛」戸島駅場役処の図
当館蔵（以下同様）



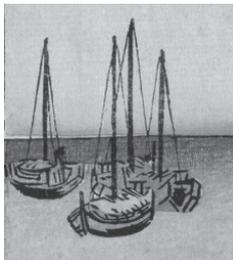
「東」鞠子



「狂歌入東海道」石薬師
慶應義塾蔵（以下同様）



⑥の部分拡大 [足]



[東] 品川 (部分)



⑦ [足] 和田村



[東] 赤坂



⑧ [足] 船岡村 (部分)



[東] 赤坂 (部分)



⑤ [足] 牛島



[東] 鳴海



⑤の部分拡大 [足]



同 [東]



⑥ [足] 五輪坂



[東] 白須賀



③の部分拡大 [足]



同 [東]



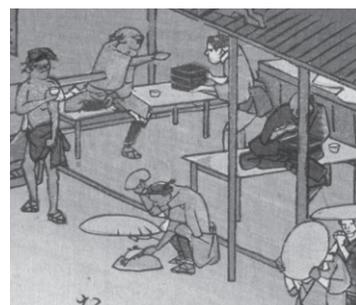
④ [足] 矢橋之図



[東] 草津



④の部分拡大 [足]



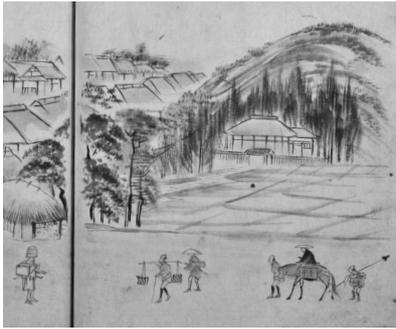
同 [東]

かける客、店先でワラジを調整する男など構成要素も同じである。しかし、店舗の位置は異なり、店を前方に出し、店の裏側に水田を描いている。八橋村は街道沿いが町場化していた農村であり、その状況を表現したとみられ、実景をまったく無視しているわけではない。

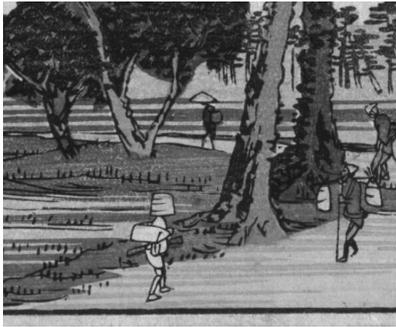
⑤牛島の場面は鳴海図から商家や通行人の一部を転用している。ただし鳴海図の右手の丘は牛島にはないため削除された。かわりに商家を増やし、荒物屋を加え、看板や通行人を増やすなど、筆者の創意も認められる。

次いで、構図を借用したと思われる例である。⑥現秋田市市内の五輪坂から日本海を眺めた図は、白須賀図とくらべると、海と陸の位置関係や道の配置がよく似ており、構図を借りたものと推測される。現地の景観とはかなり異なる。種本から構図を借りた結果、アンリアルな景観になったのである。ちなみに部分拡大図のように、⑥の海に浮かぶ船は、「東」品川図によく似たものが見える。図版は示さないが、画面右方の男鹿半島も、品川図によく似た形・位置の陸地が見いだせる。

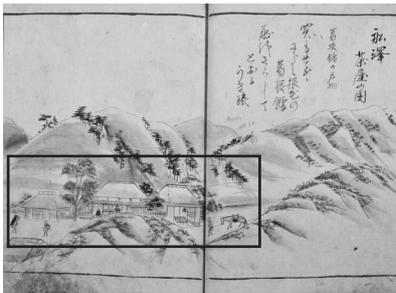
⑦和田村図の湾曲した家並み、町の入口の土塁を伴った構築物（見附）は、赤坂図の模倣である。右手の山の麓の寺院風の建物は、赤坂



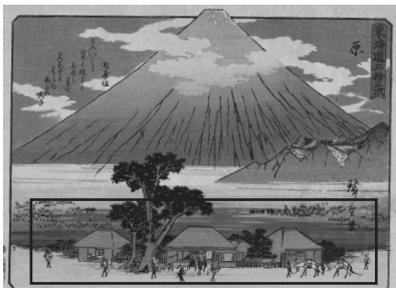
⑦「足」和田（部分）



「東」吉原



⑨「足」船沢茶屋の図



「東」原

図にはない。これは位置からみて陽田寺（現存）であり、実景に即した描き込みである。なお「東」赤坂図中の馬は、⑧「足」船岡村図にも利用されている。このように一つの図の構成要素を複数の図で利用した例もある。また、和田村図の右下の人馬は、「東」吉原図からの借用である。

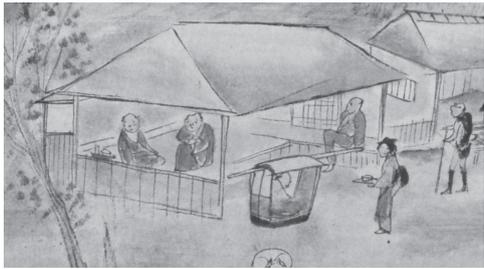
⑨船沢茶屋の図は、原の図の中の三軒の建物や周辺人物を利用して描かれており、自然景観の描写は実景に即したものとなっている。

⑩淀川村図は、三島図と橋・川・集落・樹木が同様である。右手の坂道は三島図にはない。坂を下って橋を渡り集落に至るという位置関係は、現地の実際の地形と合致している。

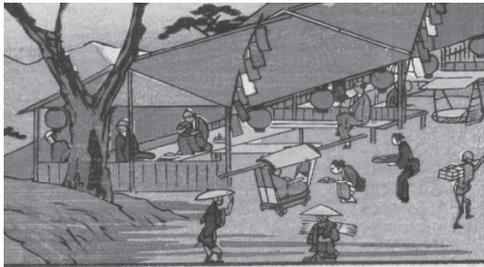
⑪四ツ小屋図の店舗部分は、保土ヶ谷図によっている。もともと、その自然景観、すなわち街道沿いに沼があり、遠くに勝平の砂山が見えるという景観は、転用ではなく実景に即している。

以上のほか、人物・建物単位で見れば、よく似たものが多数あり、気付け限りを掲げれば⑫～⑯のとおりである。

転用といっても、丸写しではない。⑯の旅籠でくつろぐ男と按摩



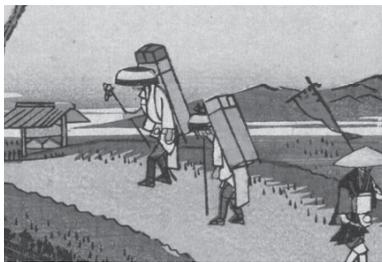
⑪の部分拡大 [足]



同 [東]



⑫ [足] 神内 (部分)



[東] 掛川 (部分)



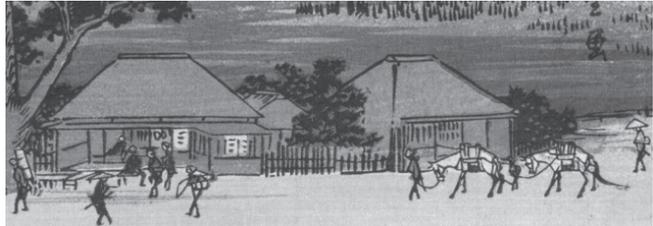
⑬ [足] 石川渡場 (部分)



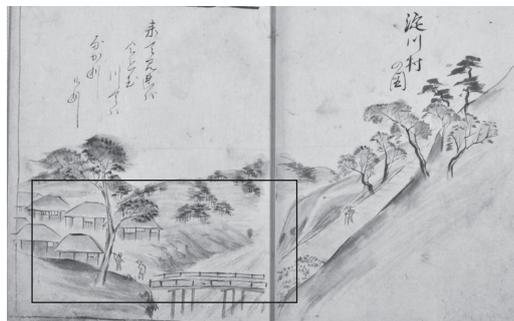
[東] 三島 (部分)



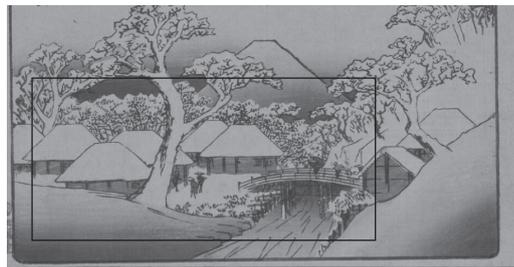
⑨の部分拡大 [足]



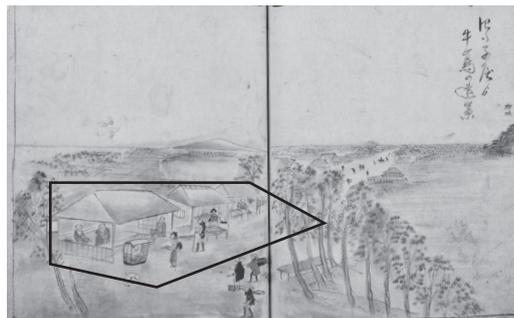
同 [東]



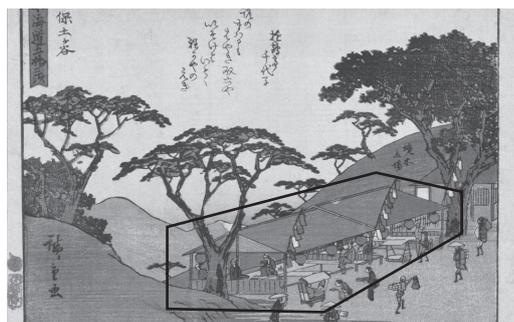
⑩ [足] 淀川村



[東] 三島 (部分)



⑪ [足] 四ツ小屋



[東] 保土ヶ谷

⑭ 「足」 戸島渡場（部分）



「東」 見附（部分）



⑮ 「足」 寺内古四王堂前（部分）



「東」 神奈川（部分）



⑯ 「足」 刈和野（部分）



「東」 石部（部分）



⑰ 「続膝栗毛五編上」より



国会図書館蔵

は、石部図からの転用であるが、肉筆の利点を活かして、種本よりも細やかに表情をあらわしている。略画風の筆づかい、垂れた目と眉、多角形の顔(⑯)といった特徴は、一九の作品の挿絵(⑰)にも共通するところがある。既存の作品を参考にしつつ、人物の表情などは作者なりの創意をもって描いている。

かくして「足栗毛」においては、軽微な引用も含めると、全二十図のうち十五図に、「狂歌入東海道」からの画像の転用が認められる。作者は広重の版画を所持しており、それを座右に置いて作画したものと想像される。

「足栗毛」の各図を、広い範囲を描いた遠景図と、店舗の中や人物の表情などが分かる近景図とに分けて考えると、転用が多いのは近景図である。おそらく作者は、人物の複雑な姿勢を表現したり、複数の人物・道具・建物を組み合わせる一つの情景をあらわしたりするのは

不得手だったのであろう。そうした部分は転用に頼り、山、沼など地形情報を主とする遠景は、実景にもとづいて自分で作画している。

三 狂歌・川柳・漢詩の引用

さて、絵画以外の文字の部分に目をむけると、やはり他の作品の引用が見いだせる。まず序文にみえる「松に雅琴のしらべとや、浪に鼓ミの音あるとや」は、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の二編冒頭に「松に雅琴の調あり、波に鼓の音あり」と酷似している。その他、画中に添えた狂歌・川柳・漢詩も、次にみるように転用が多い。

① 旅のうさはらしこそすれそこ豆の水ふくれなるおしやれ女の顔
旅のうさはらしこそすれそこ豆の水ふくれなるおしやれ女の顔
(足栗毛・刈和野)

- ② 行春のうしろすかたや峰の坂
 行春のうしろすかたやひわ峠
 (木曾街道続膝栗毛・五編下)
 (足栗毛・峰吉川)
- ③ 條風吹到隅 千里一徑間 駅亭壯遊哉 何無塵含盃
 (足栗毛・峰吉川)
- 條風吹到隅 千里一徑間 駅高壯遊哉 何無塵含盃
 (木曾街道続膝栗毛・五編下)
- ④ 不如帰じゆう自在にきく時はさかひへ半里とふ嶋ひ五厘
 (木曾街道続膝栗毛・五編下)
 (足栗毛・舟岡村)
- ほととぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐やへ二里
 (頭光IIつむりのひかりへ一七五四〜一七九六)の狂歌
 (足栗毛・船沢)
- ⑤ 買もせずさらし根花の葛根餅恥をさらしてとおるうき旅
 (木曾街道続膝栗毛・三編下)
 (足栗毛・船沢)
- 買もせず名物の名のたかみやに恥をさらしてとほるうき旅
- ⑥ ゆく水ハ矢をいる如く石川の岩をもとふしくわの弓こそ
 (足栗毛・石川渡場)
- ゆく水は矢をいるごとく岩角にあたるをいとふふじ川の舟
 (東海道中膝栗毛・二編上)
 (足栗毛・戸島渡場)
- ⑦ 郭公なくや戸島のさゝ濁り
 ほととぎすなくや太田のさゝ濁り (木曾街道続膝栗毛・五編上)
 (足栗毛・戸島渡場)
- ⑧ 此茶屋の娘かくちに乗掛の馬もたいこをうたふ橋かひ
 (足栗毛・八橋)
- 此茶屋の娘かくちに乗掛の馬もたいこをうたふ坂なれ
 (木曾街道続膝栗毛とう坂)
 (足栗毛・五輪坂)
- ⑨ くるゝ日をはなれかねけり春の舟
 山を帆のはなれかねけり春の海 (宮島参詣続膝栗毛・二編下)
 (足栗毛・五輪坂)
- ⑩ ゆくふねをつなきてひくや遠かすみ
 ゆくふねをつなきてひくや遠かすみ (宮島参詣続膝栗毛・二編下)

④の元の歌は、ホトトギスの鳴き声が聞けるような場所は風雅ではあるが不便な所であるという趣旨である。それに対して、舟岡からそれぞれ半里、三里の距離にある宿駅「境」「戸島」を、「酒屋」「豆腐屋」に掛けているらしいが、かなり無理のある駄洒落である。

⑤は船沢の名物根花餅を詠み込んでいる。元の歌は高宮という地で名物のさらしを売ろうと声をかけてきた商人に対し、業さらし(恥さらし)なら持つていると答えてかわしたという場面对応しており、名物の名高さに地名の「高」宮を掛けているのだが、「足栗毛」では状況が異なるため、その面白味は伝わらない。

⑧の元の歌は謡(うとう)坂の茶店で娘の呼び込みを断って通り過ぎたという場面である。太鼓を打つとは牡馬が陰莖を腹に打ち当てることで、「打とう」と地名の「うとう」を掛けている。しかし「足栗毛」ではその含意が分からなくなっている。

「足栗毛」は十七の詩歌を載せているが、うち少なくとも十作は他の著作からの転用である。大部分は十返舎一九の膝栗毛物から転用している。転用の仕方はしばしば無造作で、本来の趣向が損なわれたり、語呂が合わなくなったりするケースがある。字余りや誤字も目立って多い。

四 「足栗毛」の制作態度と資料性

以上のごとく、「足栗毛」は広重の「狂歌入東海道」や一九の「東海道中膝栗毛」などから画像や詩歌を多数転用している。それらの作品に触発されたことが、「足栗毛」制作の動機の一つであろう。広重は東海道、木曾街道と対象を広げながら作品を派生させた。一九の膝栗毛も東海道、木曾街道、奥州道中と次々と続編を生み出した。それらに親しんでいた「足栗毛」の作者が、地元の羽州街道の風景画を望んだとしても不思議はなからう。広重らの作品は地方の人に親しまれただけでなく、新たな画作を刺激することにもなった。そのような地

方への文化波及の一端を「足栗毛」は示している。

実景を忠実に写すことは重視されておらず、よってその景観、特に店舗や人物などの近景図は、鵜呑みにできない。たとえば寺内の現古四王神社前（前節⑮）に、蕎麦を出す店が描かれているが、この箇所は転用によるものであるから、この図から蕎麦屋があつたとみなすことはできない。

先行作品からの画像転用は、広重や一九も行っていることであり、非難に値しない。一定の虚構を含むことは、絵画としては当然のことである。また、すべてが虚構ではなく、地形、山、坂などの自然景観はおおむね現実的であり、戸島に宿駅があつたことや、牛島・八橋が町場化していたことも事実である。建物や人物像に転用が目立つとしても、これが羽州街道の沿道風景を描いた作品であることには変わりない。

それにしても、転用の多さと強引さは、にわかには理解しがたいところがある。作者は何をしたかったのだろうか。パロディを目指したのかといえば、広重や一九を下敷きに、それと異なる趣向を打ち出すものではなく、パロディとは言いがたい。「広重の羽州街道版」というほどの力作でもない。作者の制作態度はどのようなものであつたか、「足栗毛」の序文をみてみよう（傍線筆者）。

足栗毛

鹿の子出て照る月曇るむら雲や、花散さんと吹さそふ、吉野初瀬の花よりも、画道ぞものゝにしきなれ、松に雅琴のしらべとや、浪に鼓ミの音あるとや、皆風景は筆の穂と、硯の海て筆を染、足栗毛とそ名ヲ呈し、秦の趙光か馬を鹿にしたとそ、予も馬鹿らしく遮つて、ねくらに帰る雀子れ、浮世に生し其国を見ず^{キコク}に果行人多し、席上即座の便とも、規矩^{キコク}に心を慰むの一助ならんかし、みたりに嘆筆を採

嘉永七

甲とらのとし

孟春朔旦

ある主人写

大半は文意をつかみにくい戯れ文である。「足栗毛」の表紙は原装のものか明確でないが現状は黄色であり、作者は黄表紙の戯作を意識していた可能性がある。比較的意味が明瞭な傍線部では、浮世に生まれながら国を見ることもなく没する人は多い、（この作品が）席上即座の便りとも、手本に心を慰める一助ともなるう、と述べている。風景を紙上に眺めて旅行の欲求を満足させることは、広重の風景画や一九の膝栗毛物に通じる趣向である。「足栗毛」も羽州街道を眺めた気分させる楽しい作品である。「席上即座の便」とは、旅行する代わりに席上ですぐ見られる便利なものと解されるが、席画用の便覧という意味かも知れない。

この序文で作者が本作品を「規矩」すなわち手本と表現していることに注意したい。なるほど手本でありサンプルであるなら、広重や一九の名作にならうのは当然ともいえる。木曾の光景を詠んだ歌を羽州街道の絵にあてはめるのも、あくまで参考のためというなら首肯できる。「足栗毛」の画面は匡郭の線で囲まれているが、これは木版本の特徴であり、肉筆の本作品には本来必要ないものである。つまり版行された本を「擬装」しているのである。

「足栗毛」は、もし羽州街道の風景画を版行したらこうなるかも知れないという、仮構の産物なのである。そこで筆名も「ある主人」という架空の人物に設定されている。虚構の本のなかで、作者は広重や一九の名作を解体・改変して、自作の風景画のなかに散りばめて楽しんでいたのであろう。「足栗毛」はきわめて遊戯的な気分で作された、絵画による戯作である。